

豊かな自然体験が育む、自然と人との交流！

つくばエクスプレスが開通して、都会と田舎が頻繁に行き来できるようになったことを機に、定期的に自然を活かした体験プログラムを開催している、地元農家の有志による「古瀬の自然と文化を守る会」のみなさん。小絹小学校5年との出会いは20年前から。本校の周辺部には農村地帯が広がるが、田植えや稲刈りの経験がある子どもばかりではないので、稲作を体験してもらおうと、PTAが事業として取り組んだ本校での稲作指導。その活動が少しずつ知られるようになり、市内の住宅地の絹の台自治会のみなさんや、東京の葛飾区のみなさんとも交流が始まり、稲作体験や収穫祭などを積極的に行っている。



豊かな自然体験の数々・・・

〈田植え体験〉

初めて泥の中に入り歩いてみると、何とも言えない感触で、歩くのもやっとなという状態で始まった田植え体験。親指、人差し指、中指で稲5本を持ち、印に合わせて、全員が一列になり呼吸をそろえて苗を植えていく。自分の立っていた場所がへこみ次の苗が植えられないため、きれいにならず動作を教わった。次第に手付きも慣れてきて、まっすぐに植えることができるようになった。一人で行うには大変な田植えである。子どもたちは協力することの大切さを学ぶことができた。



〈草取り体験〉

稲の生長を感じながら草刈り体験を行った。草刈りは、稲を虫の害から守るための作業である。稲の害虫には、バッタの仲間のイナゴ、ガの仲間のニカメイガ、カメムシの仲間のウンカやヨコバイ、カメムシなどがいる。「大らち」（回転除草機）を使用して、稲株の間をガラガラ転がしながら除草した。大きくて重い大らちの操作が、子どもたちには難しかったようだ。



〈稲刈り体験〉

植えた苗がどうなっているのか、楽しみにしていた子どもたち。田んぼに着いてみると、腰ほどの高さで生長した金色に輝く稲に自然と笑みがこぼれていた。稲を握り、鎌で刈る単純作業だが常に中腰のため、つらそうな顔を見せていた。藁4本を斜めに交互に重ねて、古い藁で縛る。始めは縛る際に藁が切れてしまったり、縛れても緩かったりして苦戦していたが、慣れてくるとあっという間に稲の山が完成した。



〈脱穀体験〉

刈り取った乾燥させた稲から、自分たちが日常食べる白米になるまでの一連の過程の説明を受けて、子どもたちは様々な体験をすることができた。「ガーコン」と呼ばれる足踏み脱穀機、風を送って籾の重さで分別する「唐箕」、木製籾すり器、玄米から白米にする精米器などで作業を行った。役目を果たす優れた昔の器具に子どもたちは驚き、感動した。



〈灯籠体験〉

古瀬の会の方々から灯籠の材料をいただき、作製した。10月8日（日）18時より、伊奈橋付近の小貝川で、灯籠流しを行った。灯籠が三艘の川船に積み込まれ、上流からろうそくを灯し流された。夕闇が迫る中、灯籠の流れてくる幻想的な雰囲気を味わうことができた。何か忘れかけた大切なものを今に生きる私たちに伝えてくれているように思えた。



体験のまとめと今後の予定

自分の役割を理解し、一人一人が自分の責任を果たそうとする姿が見られた。泥だらけになったり、汗びっしょりになったりしながら作業を続けたことで、米作りについての関心が高まった。また、古瀬の会の方々から稲を束ねる作業の仕方を教わり、刈り取った稲を束ねたり、脱穀したりと、昔の米作りの体験をする中で、地域の高齢者との交流ができた。今後、自分たちが関わったお米でご飯を炊き、お世話になった古瀬の会のみなさんをご招待して、おいしいご飯を一緒にいただく予定である。人間は自然と共存することが大切であり、共存するにはそれぞれが譲り合い、努力が必要である。道徳性を高めるためにもよい体験をさせていただいている。多くの人と接し、多くのことを学び、一つのことをやり遂げることの充実感、達成感を感じることができるこれらの活動を今後も大切に続けていきたい。